

中仙道伝説

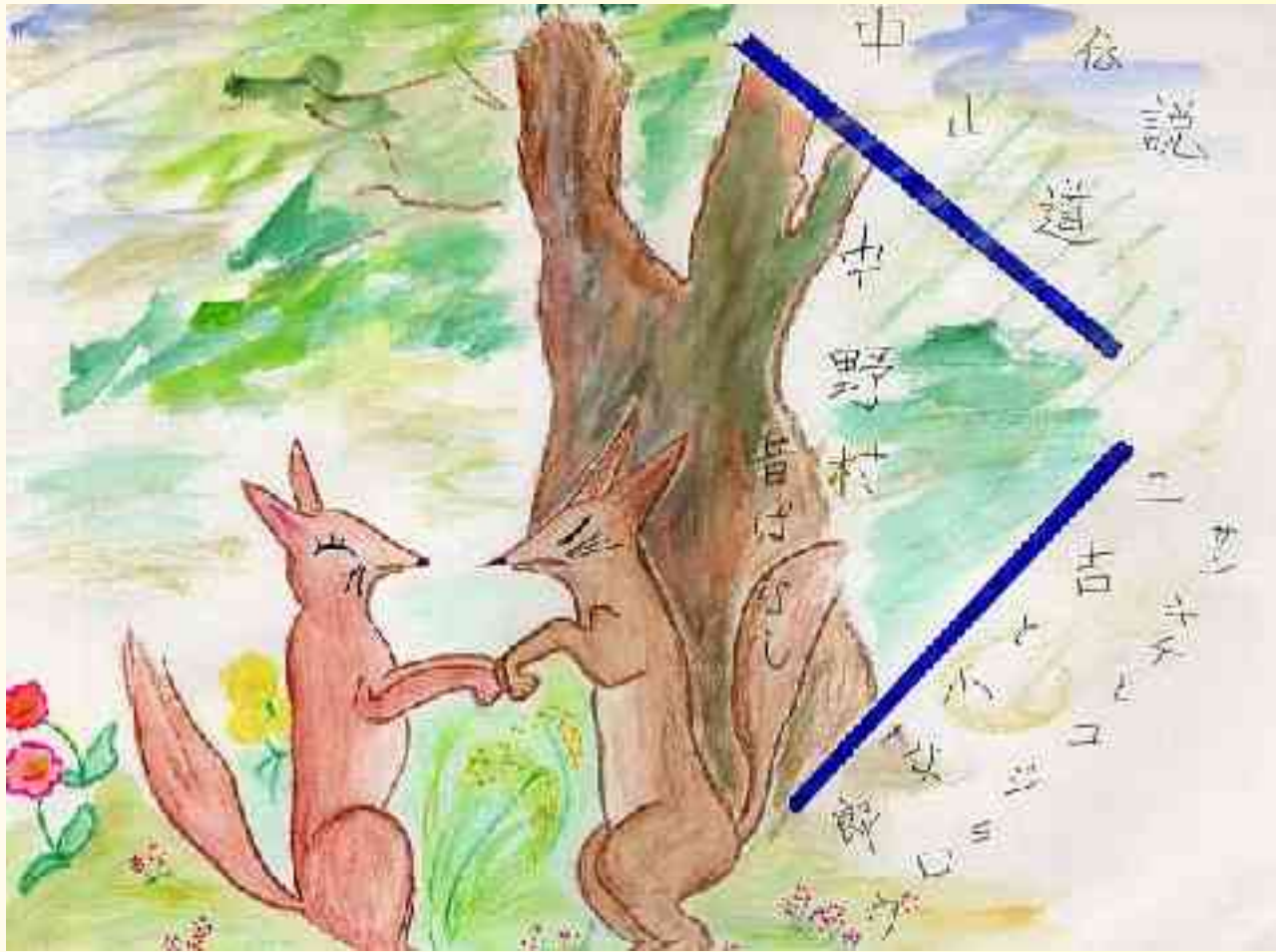
三吉と小女郎

絵・文 遠山 文枝

参考文献

昭和49年11月3日 恵那市発行

恵那市史 恵那市の昔話と歌



昔、中野村の桑下に三吉というオスギツネと羽白の山に小女郎というメスギツネが住んでいました。どちらも、化け上手で、キツネ仲間の評判になっていました。そして、二匹はお互いに「オレがうまい！」「あたいがじょうず！」と自信を持っていたということです。



昔、桑下にも羽白にもぎょうさん(たくさん)キツネが住んでいて、お互いに張り合って、ひどう仲が悪かったげな(です)。よると触るとけんか。お天道様も、お月様も なんとかならんかといつもお困りじゃったということです。



ある日、ぼったり三吉と小女郎が山道で出会いました。お互いに競争心を燃やして「ふん、化けることはオレのほうがうまいぞ！」
「ふん、あたしのほうがずっとじょうずやに！」と、思っていました。
そして、にらみ合っていました。

いいところで出会ったな、と二匹は思いました。やるか！と二匹とも、思いました。二匹は腹にグーンと力を入れ、足をよいしょとしっかりと踏ん張りました。二匹ともしっかりと心の中で呪文を唱えました。



まず、三吉が「なに！この勝負オレがもらった。」
三吉は負けずにやりかえしておいて、クルクルクルリンパ
まあ、かわいいお寺の小僧さんになりました。

お互いに、「まあ、見とらんしょ！」と、二匹ともこれから出会う場所や
審判のキツネを決めて、別れました。



三吉はかわいい小僧さんに化けて待っていました。夕方近くになって、家へ帰ろうと急いでおるおじさんに、「おじさん、今日は疲れたでしょう。ちょっと休んでいったら？」と、お百姓さんを誘い、そこら中つれ回り、畑の中のほったて小屋をお寺の観音堂と思わせて「なんまむだん。なんまむだん。」と、ありがたがって、拝んだりさせました。

または、お腹のすいている様なおばあさんには、「美味いうどんやがあるで。」と、道ばたの農小屋で草をいっぱい集めてきて「うまい、うまい」と、食べさせたりして、村の人たちを困らせて、小女郎と化け競争をしていました。



今度は、小女郎はちょっと考えて、きれいな女の子のなりました。
あんまりきれいで三吉もびっくりしたけれど、
「ふん、何だ。」まだまだ自信をもっていました。
小女郎はちょっと一杯飲んだお兄さんに
「まあ、すてき。お兄さん、遊んでいかないの？」
なんて言って、汚い川へ連れて行って、水あびをさせたりしました。



きれいなお姉さんから「いい宿屋へ案内しますよ。」
なんていわれて、汚い小屋で腐りかけの堆肥にするワラを羽布団と
間違えて朝まで寝ているお兄さんもありました。
ばかっしっぷりはたいしたもので村の人の困るのもちょうど同じくらいと
いうことで審判から「この勝負引き分け」となりました。



でも、意外なことが起こりました。だんだん二人はお互いに好きになりました。でも、二匹はお互いに桑下と羽白の仲間のことを思っいつもケンカばかりしていました。

でも、時にはケンカを忘れて仲良くお芋を焼いて食べたり、かわいい小僧さんときれいなお嬢様で、いつのまにかおデートするようになりました。



「三吉さん、これ……」モジモジして小女郎「小女郎 好きだよ」
小さなプレゼントがいつそう二人を仲良く仲良くさせていきました。お花もきれいに咲いて二匹を祝福してくれました。こうして三吉と小女郎は結婚したいと思うようになりました。けれども二匹のお父さんやお母さんも、そしてもちろん羽白のきつねも 桑下のきつねも大反対じゃったそうな。でも、二人はそっとおデートを重ねておりました。お花もお天道様も親切でした。

でも、ここで何処にもいますいじわるばあさんがこの山にもやっぱりいました。そっと木の影から覗いてお山へ帰ると両方の仲間に告げ口をしました。



いつも仲間に見張られて二匹は抜け出すこともできなくなりました。
父親ギツネも母親ギツネも、いつも三吉や小女郎を見張りました。
穴を脱け出るスキありません。
でも、三吉は男の子です。とうとう、脱け出る機会を見つけました。
そして、とうとう、穴を脱け出ました。



三吉はそっと逃げ出すことに成功したのにとうとう羽白のキツネにみつかってまい、大乱闘になりました。「ギャツ、ギャツ」、「コン、コーン」、「コン、コン、……」もう頭だか尾っぽだかわかりません。羽白か桑下かグルグル「コンコン、コン」とうとう三吉は捕まってしまいました。

三吉の悲鳴が聞えたのか羽白の洞穴で小女郎が「三吉つぁーん」でも、三吉にはこの小女郎の必死の叫び声がかすかに聞えました。もうろうとしたなかで小女郎の声を聞きました。



やっと桑下のキツネ穴まで三吉はたどり着きました。ひどい怪我でしたが、とうとう死んでしまいました。お父さんギツネも母さんも姉さんギツネもみんな泣きました。大粒の涙はいっぱい流れ落ちました。

キツネ穴にもお山にもその日はキツネ火も燃えず、暗くひっそりしていました。そして、「コーン、コーン」と、低い泣き声がお山の風に乗って何処までも低く、低く流れました。



三吉は死んでしまいました。三吉の亡くなったことは桑下から羽白の山に伝わりました。小女郎の耳にも伝わりました。それからの小女郎は山陰の切り株にもたれて「三吉つあん、三吉つあん」と、小声でつぶやいて泣いてばかりいました。涙が枯れるほど泣いてたあと、みんなの隙を狙ってとうとう首をつって死んでしまいました。

時は移り、ケンカ続きのお山にも新しい時代が訪れました。
キツネたちの居場所はだんだんせばめられました。
いつのまにかとても少なくなり悪さをする話も聞かなくなりました。
今でも雪の降る寒い夜にはキツネの鳴き声が聞えるそうで、
なんだかかわいく、懐かしいですね。

三郷稻荷は、ずうっとその後にできたということです。

三吉と小女郎という紙芝居をさせていただきました。

中山道中野村に伝わる昔話

人から人へずっと長い間、語り継がれたお話は
いつか語り継ぐ人がいなければ

忘れ去られてしまいます。

ジツサマ、バツサマの話は故里で生まれ、
故里で育った大切な心の財産です。

伝説と昔話は線をひくことができませぬ。

ただ、消えさせたくないのです。

語り伝えていきたいのです。

祖先から受け継いだ郷土の最大の遺産を

八十才のババアにはこの力にも限界があります。

麻痺した手の日本の指が私の宝物であり、

最高のつれあいです。